



蝦蟇・鉄拐図 広渡心海 2幅 潤谷寺（福井県三国町）



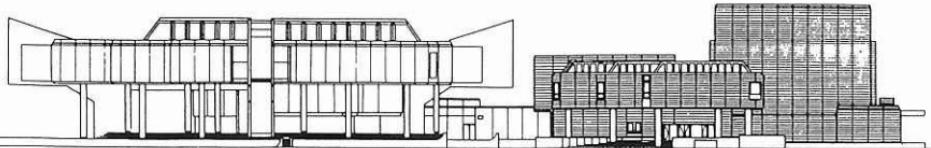
※2.3頁に資料紹介

# 佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

20 March 2002

No. 128



## 資料紹介

## 福井県瀧谷寺所蔵の広渡心海筆《蝦蟇・鉄拐図》

—美術館常設特別展「時代をえがく—肥前佐賀の絵師—」から—

広渡心海、岡雪山、友閑斎有信ノ三人ハ京摶ニ  
モ知ラレタリ 一柴田花守「画学南北弁」—

「京摶(京都・大阪・兵庫の一部)にも知られたり」とは、江戸前期(17世紀)の肥前佐賀の絵師、心海ら三人の生涯に限定したことではなく、むしろ江戸末期(19世紀)の著者柴田花守(1809~90)の時代を尺度にしていると思われる。

紹介する《蝦蟇・鉄拐図》(表紙写真参照／2幅／紙本墨画淡彩／縦118.5cm・横54.6cm)は越前の名刹、真言宗瀧谷寺に残されている(以下、「瀧谷寺本」と記す)。心海のこととはどれだけ知られていたのであろうか。卷留には同寺34世雄光(?~1809)の名がみられるが、くわしい伝来事情はあきらかでない。

肥前武雄を出身地とされる広渡心海には、署名に「肥之前州」あるいは「肥陽」と併記された作品がみられる。これは心海が肥前という枠をこえて活動したことを示唆するもので、現に江戸で狩野益信(1625~94)の門人となり、延宝2年(1674)にはじまつた京都における禁裏新院造當て被繪制作に参加、内侍所東之間に花鳥画をえがいたことが知られる。法橋の位にあったことは心海の画技が認められていたことを物語るものであるし、さらに長崎の広渡一湖に画技を伝授した事績も付け加えねばならない。

本稿では心海の《蝦蟇・鉄拐図》を紹介し、あわせて心海の履歴について言及してみたい。

## 図様の系譜

瀧谷寺本は、右幅に自分の魂を吹き出す鉄拐仙人こと李鐵拐と、左幅に蝦蟇を背負う蝦蟇仙人こと劉海蟾が、ともに半身像でえがかれている。

瀧谷寺本の図様は、中国の顏淵筆《蝦蟇・鉄拐図》(知恩寺)の系譜をくんんでいる。顏淵作品では背景をともなう全身像であった両仙人を、いつきい背景を省略した半身像にかえたのは狩野探幽(1602~74)である。京都南禅寺所蔵で承応3年(1654)の年記をもつ探幽筆《達磨・蝦蟇・鉄拐図》をみれば(以下、「南禅寺本」と記す)、瀧谷

寺本が探幽の図様と近い関係にあることがあきらかとなる。心海は探幽の養子益信の門人なので、探幽の図様に習う作品が伝わるのはむしろ当然のこと。

もうひとつ《探幽写し》の名称で武雄領主鍋島家に伝來した探幽作品の模写のなかに、蝦蟇・鉄拐図がみいだされる(以下、「探幽模本」と記す)。この探幽模本については、筆者として武雄の八代領主鍋島茂義(1800~62)が考えられている。佐賀藩が所蔵していた書画類の目録、「御掛物帖」(鍋島文庫蔵／県立図書館寄託)記載の「中達磨左右鉄拐蝦蟇天祐賛左右龍虎江雪賛左右梅竹大徳天室一如賛」七幅對を原本とし中央に達磨、その左右に蝦蟇・鉄拐・龍・虎・梅・竹を配した七幅對の珍しい作例であり、「探幽斎筆」の署名、「法眼探幽」朱文方内印・「守信」朱文鼎印・「守」白文変形印をはじめ、贊文までも同寸大に丁寧に模写されていて、原本の探幽作品がよく再現されているとみられる。

探幽模本と南禪寺本とは類似しているが、いくつかの違いが観察される。探幽模本では、たとえば蝦蟇仙人で蝦蟇の上方の靈氣と左手にもつ桃が左手とともに省略されている。鉄拐仙人では、南禪寺本にはない左肩の着衣の縫い目が点線によつて描写されている。

これらの点に着目すると、瀧谷寺本は南禪寺本より探幽模本に筆致までも酷似していて、探幽模本の原本になった「御掛物帖」に記載される佐賀藩所蔵の探幽作品をもとに、瀧谷寺本が制作された可能性が指摘できる。

しかし心海は佐賀藩本を忠実に模写しただけではない。蝦蟇と鉄拐の両者の腰から下には淡墨で雲が描き加えられている。また蝦蟇仙人の姿は幾分上にあり、右幅鉄拐仙人の上目遣いの視線との呼応関係がうまれていて、七幅對を二幅對の作品



右幅落款(1/2)

とするための心海の工夫がうかがえる。

#### 心海の没年と瀧谷寺本の制作時期

現在確認される心海の作例は、およそ20点程度。すべての作品に「心海法橋」の朱文方印がおさされている。瀧谷寺本の落款にも両幅に「広渡法橋心海六十八歳筆」と署名され、「心海法橋」の朱文方印がおさされている。68歳作の瀧谷寺本のほかにも年齢を併記する作例がみいだされる。

- ・騎龍觀音図 67歳 鎌島報效会
- ・拾得図 68歳 神戸市立博物館
- ・大黒天図 70歳 個人蔵

ここでは心海の没年を確認してみたい。石井良一氏の「画師法橋心海及雪山の一門」(1925年稿／『武雄史』)には、心海をはじめとする広渡家の系譜がしめされている。心海は寛文4年(1664)に法橋となり、貞享2年(1685)に数え年90歳で死去したとされる。佐賀藩のお抱え絵師広渡雪山(?～1674)と心海との関係についても、心海の父万右衛門が死去したとき心海はまだ「幼稚」で、そのため万右衛門の弟雪山が広渡家を相続。同時に万右衛門の妻を娶り、心海の成長後に家督を譲り雪山は本藩に召し抱えられたとされる。

心海と雪山の統柄については、雪山側からの史料「広渡家系図」(1849年)などによって傍証される。一方、石井氏による没年と享年を基準とすると心海の生年は慶長元年(1596)で、法橋叙任は69歳のことになるが、このことについては訂正が必要となる。

たとえば心海には68歳作の瀧谷寺本をはじめ、67歳作《騎龍觀音図》などの法橋落款の作品が、すでに存在するし、現存するすべての作品が69歳

以降というのも不自然だ。また心海の父万右衛門の墓は武雄市の淨土宗西福寺に確認され、墓碑から慶安2年(1649)に死去したことがわかる。父万右衛門死去(1649年)のとき心海54歳。これでは心海が「幼稚」のため、ひとまず雪山が広渡家を相続したとする説と辻褄が合わない。

平成5年のこと、雪山の広渡家の菩提寺、淨土宗光照寺(佐賀市)において、雪山だけではなく心海の墓碑も確認することができた。光照寺に心海の墓がある理由は定かでないが、墓碑には表に「願会法橋心海無生居士」とあり、裏は没年をしめす

「元禄」という文字までが判読できる。これは「広渡家系図」の心海の項にみられる「願会法橋心海無生居士／元禄十六癸未十月六日」という記述と符合するもので、心海の没年は元禄16年(1703)とすべきである。

また享年については、年齢併記の作例で最高齢作の《大黒天図》をもとに、たとえば70歳で死去したと仮定してみる。父万右衛門死去のとき心海16歳。雪山が本藩に召し抱えられたのが承応3年(1654)であるので、心海21歳となり、石井氏の説との整合性もうまくいく。あくまで仮定だが寛文4年(1664)の法橋叙任は31歳。およそ40年間を法橋の位にあったことになり、現存するすべての作品が法橋時代といえることも理解される。

心海は元禄16年(1703)に70歳あまりで死去したとみられる。つまり瀧谷寺本の制作時期は、心海の最晩年に近い1700年頃の作例とみなすことが可能で、心海の画風展開を解明するうえで基準となる作品といえよう。 (学芸員 福井尚寿)



《探幽写し》 伝鍋島茂義筆 武雄市教育委員会

## 北条氏と肥前一テーマ展示「肥前の中世文書Ⅲ」に寄せてー

文永11年(1274)・弘安4年(1281)の2度にわたって起きた蒙古襲来(元寇)は、鎌倉時代の日本に大きな社会変動をもたらした。蒙古軍に直接襲撃を受けた九州では、その影響はより大きく具体的な形で現れた。それは、ここ肥前においても例外ではなかった。

今回テーマ展示「肥前の中世文書Ⅲ」でとりあげたのは、大和町の高城寺と三田川町の東妙寺に伝来した文書群であるが、この二カ寺はいずれも蒙古襲来の頃に建立された寺院である。東妙寺の場合、開山の唯上人によれば、同寺建立の趣旨は「四海静謐・異賊退散を祈請する」とことされる(東妙寺文書永仁6年(1298)7月14日官宣旨)。東妙寺は、後宇多天皇の勅願を受けた祈祷寺として、異賊(蒙古軍)の退散を祈ったのである。高城寺の場合、開基や開山が建立の動機を書き記したものの中には直接的に異国降伏を願うような文言はみられないが、これもまた広い意味では蒙古襲来の影響下にあると考えてよい。蒙古襲来を契機として、鎌倉幕府の執権を務めていた北条氏一門、特に嫡流家の家督である得宗の専制化は加速していく。高城寺の建立は、そのような北条氏勢力と結びつこうとした、在地領主分氏の積極的な意思の現れであった。その様相を、既往の研究に振りつつ概観してみよう。

### 肥前高城寺の創建

春日山高城寺は、鎌倉時代後期の文永年間に久池井の地頭國分忠俊が開基檀越となって創建した禅宗寺院である。文永7年(1270)の開堂と伝えられるが、高城寺文書中に寺名が明確に現れるのは弘安8年(1285)であり、文永7年(おそらくは10年)以降、国分忠俊の寄進を受けて寺としての姿を整えていったのではないかと思われる。

開山の蔵山順空(元鑑禪師)は、水上山万寿寺の神子崇尊のもとで出家。京都東福寺や鎌倉の建長寺で円爾弁円や蘭渓道隆らの高僧に師事し、弘長2年(1262)には入宋して、中国各地で禪を学んだ。当時、北条氏をはじめ鎌倉幕府中枢の人々は、宋

から新たにもたらされた禅宗に深く帰依していた。順空は、鎌倉幕府の執権を務めた北条時頼と親密な関係にあり、順空の入宋も時頼の勧めによるものであったという。

蔵山順空と国分忠俊が関係をもつたのは、文永8~10年頃、忠俊が氏寺の尊光寺(天台淨土系の寺院であったと推定されている)の院主を物色していた時期であったらしい。国分忠俊が開基となった2つの寺(尊光寺・高城寺)の建立の動機として述べられるのは、「武藏前司入道殿(北条泰時)ならびに最明寺殿(北条時頼)」の追善である(高城寺文書永8年8月27日国分忠俊・明阿弥陀仏連署寄進状等)。信仰はともかく、肥前の在地領主である国分忠俊にとって、順空を氏寺尊光寺の院主とすること、さらに禅宗寺院の高城寺を創建して順空を開山として迎えることは、北条氏との関係を深め自己の権威を高めて、在地における影響力を増大させることを意味したのである。このような動きは、北条氏が肥前国の守護になるとますます顕著になる。その1つの頂点を示すのが、弘安11年(1288)頃から運動が始まり、正安2年(1300)に実現した高城寺の開闢祈禱寺化であった。

### 肥前守護武藤氏

鎌倉時代、各国には鎌倉幕府の御家人支配機関である守護が置かれた。肥前の国では鎌倉時代初期から武藤(少式)氏が守護を世襲していた。初代の武藤資頼は、源頼朝の信任を得て草創期の鎌倉幕府の九州支配を担った人物である。九州下向後資頼は、大宰府に守護管領機関である宰府守護所を設け、筑前・肥前・豊前の3カ国と後に対馬の守護職を兼帯し、大宰少式にも任じた。資頼が肥前守護として活動していることを史料的に確認できるのは元久元年(1204)以降であるが、建久末年(1197頃)の九州各守護の設置以来同職にあったものと思われる。安貞2年(1228)に資頼が没すると、子の資能が跡を継ぐ。資能もまた三重と対馬の守護職を帯し、後に壱岐守護にもなっている。

資能は存命中に嫡子経資に家督を譲った。守護

職の移譲は文永12年(1275)の初めとされる。経資は、三前二島に加えて一時期肥後・筑後の守護にも任じ、蒙古襲来時には豊後守護の大友頼泰と共に九州の御家人を指揮して防備にあたり、鎮西東西奉行と称される如く九州全般に及ぶ権限を行使した。このように、肥前の守護は、鎌倉時代初期から約80年にわたり、武藤氏三代が務めてきた所職であった。

### 北条氏と肥前

しかし、蒙古襲来という未曾有の対外的危機がこの状況に変化をもたらした。蒙古の日本侵攻がほぼ確定的となった文永8年以降、幕府は異国防御の態勢を整えていくが、その主な担い手となつたのは九州に所領をもつ御家人、中でも九州に定住している御家人たちであった。彼らは各國の守護によって統率されていたため、文永・弘安の2度の合戦を経験し、また逆に日本からの高麗侵攻を計画する過程で、幕府は西日本を中心に大規模な守護職の交代を行い、北条氏一門をこれに任じることによって戦備の増強をはかつた。防備の拠点となる九州では、武藤氏の筑前・大友氏の豊後・島津氏の薩摩を除く6ヶ国が北条氏の守護管領となつた。肥前においては弘安4年(1281)に武藤経資から北条氏へと守護職の改替が行われた。

北条氏の一族で初めて肥前守護になったのは、北条時定(のちに為時と改名)である。時定は幕府の執権を務めた北条時頼の同母弟で、執権時宗の叔父にあたり、得宗に極めて近い人物であった。時定は阿蘇社との関係から肥後に所領を有しており、建治元年(1275)頃には一時的なものかもしれないが九州に下向していたらしい。肥前守護としての史料の初見は弘安4年8月である。

先述した高城寺の関東祈禱寺化の動きは、時定の守護在任中に始まっている。高城寺文書弘安8年(1285)2月23日北条時定書状は、時定と高城寺との関わりを示す最初のものであるが、ここで時定は、北条泰時・時頼父子の追善という寺院建立の目的に触れ、寺領の保全を保證している。弘安11年には、時定は高城寺の外護者である国分季高(忠俊の子)に対して高城寺を関東祈禱寺にする件

について打診を行った(高城寺文書同年2月4日北条為時書下)。同文書の本文中に「挙状(推薦状)を書き与うべきの由、当寺長老申さる」とあるよう、高城寺の関東祈禱寺化は、蔵山順空の働きかけによって行われたものである。その後の経過は不明ながら、高城寺は12年後の正安2年(1300)11月25日に関東祈禱所とする旨の幕府の下知状を得た。順空を住持に迎え、北条氏=幕府とのつながりを志向してきた開基国分忠俊の意図は、ここに一定の達成をみたといつてよい。

この時肥前の守護職は、時定の没後跡を継いだ北条定宗(正応3年(1290)~永仁3年(1295)在任)を経て、北条(金沢)実政へと替わっていた。実政は、建治元年(1275)に九州に下向し、一時長門探題となつて九州を離れたが、永仁4年(1296)に再度下向、蒙古襲来後幕府が新たに設置した九州の統治機関である鎮西探題に任じた人物である。その後鎌倉時代末まで、肥前守護は鎮西探題が兼任することになる。歴代の探題は、北条政顕(実政の子)：正安3年(1301)~正和4年(1315)、北条種時(政顕の子)：正和4年(1315)~正和5年(1316)、北条時時(時定の孫・定宗の子)：文保元年(1317)~元亨元年(1321)、北条(赤橋)英時：元亨元年(1321)~元弘3年(1333)の在職順である。この間、探題の交代に伴う若干の「未補」の期間があり、また種時を鎮西探題とするかどうかかも議論の分かれるところであるが、いずれにせよ鎌倉時代後期の肥前守護は一貫して北条氏の手中にあり、肥前は北条氏の分国であったといえる。このような中で、高城寺は、歴代の守護(探題)の保護を受けつつ発展していくのである。

### 『参考文献』

上田純一『九州中世禅宗史の研究』(文献出版、2000年)  
川添昭二『九州中世史の研究』(吉川弘文館、1983年)

同 「肥前守護北条時定(為時)」(『日本歴史』500号、1990年)

佐藤進一『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』(東京大学出版会、1971年)

瀬野精一郎『鎮西御家人の研究』(吉川弘文館、1975年)  
(学芸員 本多美徳)

## エッセイ

## ギャラリートークと来館者



「美術館名品巡回展」会場でのギャラリートーク風景

### 当館の「ギャラリートーク」の状況

佐賀県立博物館・美術館では、年に開催される企画展、常設展、常設特別展等のそれぞれについて、学芸員によるギャラリートークを実施している。展覧会にもよるが、実施は週に1～2回、所要時間は1時間程度を目安とし、人数の多寡によらず、希望者が1人でもあればおこなっている。

基本的にトークは展覧会担当の学芸員によりなされるが、自身の担当外の展覧会についても、学芸員全員が担当者からレクチャーを受け、概要説明や簡単な質問等には対応できるようにしている。だから、年間必ず何回かは、自分の担当外の展示であってもトークをおこなっていることになる。

ギャラリートーク自体、展覧会と一体となつた教育普及活動の一環として、大多数の展示施設で実施されているので、取り立てて特別なものとはいえないが、来館者にとっては、より深く展示を楽しむための重要なきっかけであり、また、博物館・美術館をさらに身近に感じができる最大の機会ではないかと思われる。当館では「親しみやすい博物館・美術館」を目指し、そのひとつとして、2年程前からトーク実施の機会、回数を大幅に増やした。これは来館者をおおいに歓迎されているようで、当館の企画・催しに対する関心度や反応が、以前よりずっと高くなつたようを感じられる。

私たち学芸員にとって「お客様」の声を直に聞く機会は、実は意外に少ない。しかし、机上で

はうかがい知れない来館者の生のことばにこそ、私たちが目指すべき博物館・美術館の未来像についての、もっとも重要な示唆が含まれているはずである。

どんなことを話すか

トークの内容については学芸員個人の裁量によるが、一般的には①展示の主旨、意図について②作品資料のより詳細な解説と、作家または展示物にゆかりのある人物や時代背景について③企画、展示にあたつての裏話(一般成人にはこれがもっとも受けがよい)等が主になるだろうか。

自主企画の展示・展覧会は、学芸員の日常の調査・研究活動の集成といえるが、その過程で得る作品資料についての数々の「情報」には、一般の方には知りえないもののがかなりある——例えば絵画でいえば、キャンバスの裏面は通常の展示では見ることができない。しかし、そうした部分に作品を読み解く重要なヒントが隠れたりするものだ——こういった「見えない情報」についても、キャプションや写真パネルにしてできるだけ盛り込んで構成し、展示する。盛りきれなかつた分については、トークで補う。

鑑賞者にとって、見えない情報を知るということは、驚きであり、新鮮な「発見」である。それによりもたらされた感動は、博物館・美術館での最も良の体験であるだろう。トークは展示の補助的な役割をはたすにすぎないけれども、鑑賞者の発見=感動をよりスムーズに、かつ劇的にうながすきわめて大切な役割をになっている。

だがしかし、実際には私たちの思惑どおりにはいかないこともしばしばである。いずれの博物館・美術館も試行錯誤を繰り返していることと思う。

会場にて一みな、何を求めているのか

展示施設へ足を運ぶ人々は、展示に何がしかの興味があるという点では共通しているが、年齢、性別、職業、在住地、また文化に対する認識や知識、経験、そして感性、好みがまちまちであり、

それぞれに、展示を観ることで得たい満足、満たしたい欲求が微妙にことなっている。油絵を観に来た人と土器を観に来た人では、ものを観る視点が明らかに違うし、さらに美術作品に絞るとなおさら、鑑賞者の興味のありか、感受するものの中身と質は様々になる。

ある時、私のトーク中にこういうことがあった。抽象絵画の展示で、話をはじめようとした私をさえぎるように、来館者のひとりから声があがつた。「この絵にはいったい何が描かれているのか、まずはそれから教えて欲しい」。概念を表現化する抽象絵画では、具体的なモチーフを持たないか、あるいは極端にデフォルメされ、俄かには確認できない場合がほとんどである。しかし、その人にとってみれば「描かれたモチーフを特定する」ことが、あらゆる絵画に触れる自分なりの第一歩であったのだろう。結果、作品解説はそこそこに、抽象絵画の本質と見方についてのトークとなってしまった(これはこれで意義があったと思うが)。

このトークでの出来事は、私にとって来館者への認識を新たにするよい契機になったとともに、私たち学芸員に対する重要な問い合わせでもあったように思えてならない。私たちはお客様について、はたして、どれだけのことを知っているのだろうか。

#### こどもたちへの「ことば」

佐賀県立博物館・美術館には年間に二万人以上の児童が訪れる。近年は「総合的な学習の時間」での利用により、学級単位での訪問が著しく増加している。

こどもたちへのトークは、成人へのそれとは微妙にことなったアプローチが必要である。

よりやわらかい語り口をこころがけ、使用する単語は学年による学習の到達度を考慮し、注意深く選択する。例えば、小学校低学年においては「弥生時代」というより「今から二千年前の弥生時代」とした方が、歴史のスケールを感じやすい、といったことなど、こちらのちょっとした工夫により、トークをいつそう生きたものにすることができる。

さらに、こどもには展示についての出題というかたちで話しかけをおこなうと、より樂しみながら展示に関心を持つてゐようである。「ムラの周りに、たくさんの尖った木がさしてあります。これは何のためでしょうか」とたずねると、こどもたちは今まで以上に展示に目をこらし、懸命に思考する。ここで彼らは、展示物が単に「珍しいもの」であるという認識から一步抜け出し、そこに意味や機能が宿っていることを知るのである。

こどもは、成人に比して実によく質問をしてくれる。それらはこどもらしさ、突飛で愉快なものばかりである。「この絵はいくらぐらいなんですか」「刀はほんとうに切れるのですか」果ては「泥棒が入ったら、学芸員さんが捕まえるんですか」。

もちろん、こうした質問にもきちんと答えるのだが、上の例のように、こどもたちは展示のみならず、学芸員という職業にも興味をしめし、トーク中にも私たちの仕事についてざかんに質問をしてくることがある。これは高学年になるほど顕著で、県内中学校・高校からは「職場体験学習」の依頼もしばしばである。

#### 対話からはじまる「今後の博物館・美術館」

ギャラリートークといえば、ともするとこちらから一方的に話すだけという展開になりやすいのだが、私はやはり、対話が成立してこそそのトークであると考えている。これは成人もこどもも同様で、実際に向かい合い、ことばのやりとりを通じて互いを知ることで見えてくるものがある。私たちの仕事の真の目的は、文化を伝えることを通じて、文化を愛好する心を持ち得る「人を育む」ことであるのだ。

最後に、こく最近のトークでの出来事を。

展示作品についてつい夢中になって話していたところ、話の輪の外で絵を鑑賞されていたご婦人から、そっと声をかけられた。「もうちょっと静かにしゃべってもらえませんか」。

たかがギャラリートーク、しかし「されど」である。まだまだ精進が必要のようだ。

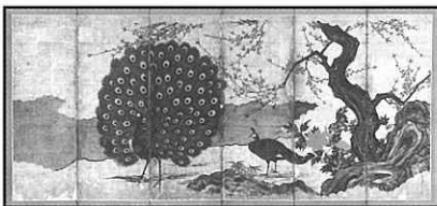
(学芸員 野中耕介)

■平成14年度の展示から

■美術館企画展「佐賀鍋島藩の美術」

平成14年10月25日(金)～11月24日(日)

江戸時代、佐賀鍋島藩は、鍋島藩窯、鍋島緞通、鍋島更紗、肥前刀など、全国的にも特色ある文化を育成した。佐賀鍋島藩300年の歴史の中で生まれた美術工芸品にスポットを当て、その文化的業績の一端を明らかにする。



狩野高信筆「四季孔雀図屏風」(佐賀県立博物館蔵)

■博物館常設特別展(美術館2・3号展示室)

◎夏休みこどもミュージアム 消えゆくいきものたち 平成14年7月12日(金)～9月1日(日)

佐賀県版レッド・データブックに登場する、今日では貴重種となった動物・植物を中心に紹介し、自然への关心と環境の大切さを呼びかける。また、開会中こどもたちを対象に、動植物の観察画を描くワークショップや標本作成教室を開催。

◎肥前国産物図考の世界 平成15年1月31日(金)～3月2日(日)

18世紀後半に描かれた唐津藩領内の産業絵巻「肥前国産物図考」全8冊を一挙公開。あわせて民俗資料や自然史資料、現況写真等を紹介しながら過去と現代とを重ね、唐津地方の原風景を探る。

■博物館テーマ展(博物館3号展示室)

よみがえる肥前刀<工芸> 4/16～6/2

漆の美<工芸> 6/4～7/21

君も米づくり探検隊！<民俗> 7/23～9/19

肥前の中世文書IV<歴史> 10/9～11/24

遺跡発見！一天保から平成まで<考古> 11/26～1/13

石は語る<自然> 1/15～3/2

黄泉国を開ける<考古> 3/4～4/13

■美術館常設その他

◎郷土の画家たち(美術館2号展示室)

昭和の絵画 9/11～9/19

ひとを描く 11/29～12/26

西洋で描く 1/2～1/26

春を描く 3/7～4/13

◎その他(美術館2号または3号展示室)

新収蔵品展 4/18～5/19

近代の書 5/23～6/8

書に見る明治の群像 11/29～12/23

森通展 3/7～4/13

佐賀県立博物館・美術館報 第128号

平成14年3月20日

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 国0952-24-3947 国0952-25-7006

印刷 大同印刷株式会社